慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・M・チポールラ 中世後期の伊太利経済史における諸傾向
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.1 (1952. 1) ,p.69- 70
JaLC DOI	10.14991/001.19520101-0069
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520101-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

それは戰略的觀點の前進ということであろう。直接的な軍事的考慮を離れて考えて見ても、動亂後の列國によるこの地域の戰略資源の大量買付は、この地域の貿易事情に激變をもたらし、若干の例外を除いて出超に轉じ、一九五〇年に總計八億ドルを超える出超額を記錄したと傳えられる。そのことが戰後の深刻なドル不足問題の解消に資した效果は認めるとしても、かかる傾向の存續が可能か否か、さらにまたかかる戰前の地位への反轉が假りに恒久化するとすれば、それは何を意味するか、愼重な考慮を要すべき問題といえよう。

戰後の東南アジア諸國における自主的な經濟的近代化計畫の推進が、困難であるとしても、嘗ての資源供給地としての地位への復歸が、自主性の確立にとつてプラスか、マイナスか、貿易面における受取超過の全額のみによつては輕率に判定し難い問題を含んでいるものと見なければならない。

右は一つの例に過ぎないが、アジアに緊迫した情勢の續く限り、同樣なことは他の種々の部面においても起りがちと見られよう。現實の必要の前にたやすく押し流されてしまうことは、東南アジア諸國の近代化という長期の目標の實現のためには、とらない所であろう。しかも本書によつて提起されている幾つかの問題についても、同じアジアに屬する國民として、われわれも亦、共に解決を志すべきものを含んでいるとはいえないであろうか。

三田學會雜誌前號　目次

第四十四卷・十二月號

講和と日本經濟
——わが國産業構造の當面する基本問題——……伊東岱吉
第十六世紀アンヴェルスにおける商業と道德……渡邊國廣
英國功利主義の社會思想的意義
——J・S・ミルの社會觀に關連して——……服部成三郎
（書評）
大島藤太郎「國有鐵道の史的發展」
島恭彥「日本資本主義と國有鐵道」……增井健一

論文紹介

C・M・チポールラ
『中世後期の伊太利經濟史における諸傾向』

（C. M. Cipolla, "The Trends in Italian Economic History in the later Middle Ages" Economic History Review. No. 2. 1949. pp. 181—184）

第十三世紀の伊太利は概して好況に惠まれた。然し産業投資は工業分野において特に目立ち、從つて生産の上昇も工業に關する限り急速であつた。例へばフロレンスに繁榮した織物工業についていへば、この世紀の末頃までには一年間に優に十萬反を生産することが出來た。又資本の他の部分がこの時期には都市建設に向けられ人口の顯著な增加と共にここに多くの新興都市の華々しい誕生となつたが、然し農業投資は農村資本の增加を含めても尙非常に貧弱であつて、一部の商人や銀行家の間に農村への經濟進出を志すものもあつたが、多くは依然として土地の單なる獲得といふことのみに終始し、この期間の殆んど全部を通じ農村は全體として見れば未だに封建權力の下にあり、農村における人口增加率は都市の急速なそれに僅かに及ばなかつた。

第十四世紀の伊太利は前世紀末からこの世紀の初頭に連續的に起つた大恐慌に禍いされてか一般には極度に不況であつた。フロレンス銀行がこの期に倒産してゐる。産業投資は如何なる分野においても不振を極め、生産活動は全般に亘つて一向に振はず、前世紀の著しい特徴となつた大規模な發展がこの世紀には全くなく、一般には寧ろ却つて退歩の傾向をさへ示してゐた。一例をフロレンスの織物工業に取つて見ても、その年産額は末期にはこの世紀の初期のそれの二割に當る二萬反が精々であつたといふ。都市は極端に衰微し、その內部に無住地の見られることも屢々であつた。從つて都市の新設は無論ない。特に一三四八年の黑死病は物凄く、これによる大打擊は伊太利の人口にとつて恢復し難い非常な痛手であつたらしく、第十四世紀の末期において總人口は初期のそれを遙かに下廻つてゐた。

第十五世紀と共に然し景氣は恢復した。工業生産は漸次に伸張して行つた。商業活動もその例外ではなく、物價は上昇の傾向をさへ示して來た。然し都市のこのやうな復活に比較すれば、農村の進出がこの時期には意外に顯著であつた。農業投資は增加し、このため土地の開發・黑河の開鑿が進んで、第十五世紀に伊太利農村は一時に繁榮した。

農村のこの繁榮は然し何よりも先づ當時の伊太利人の意識に起つた深い變化に歸せられる。資本家達には土地が最早や虛榮

のための單なる手段であるとは思へなくなつて來た。彼等は土地を政治權力の主要な基礎とも又生活資料の重大な給源とも見ず、既にこの時期には土地を經濟利益の貴重な源泉と看做すまでになつてゐた。そして土地に對する新しいかかる態度が彼等を驅つて農村に向はせたこの第十五世紀には、未開地への進出が殊に目覺しく、或る意味で第十五世紀の伊太利には西漸運動の華々しかつた第十九世紀の亞米利加にも對比さるべきものがあつた。

（渡邊　國廣）

E・E・リッチ

『エリザベス朝イングランドの人口』

（E. E. Rich, "The Population of Elizabethan England" Economic History Review, No. 3. 1950. pp. 247—265.）

一八〇一年以前には官廳統計もない。嘗て人口數の推定は專ら洗禮や埋葬の臺帳の調査に據つて來たが、到底これ等から正確な數字は得られる筈がない。然し本稿での當面の課題は、エリザベス時代のイングランド人口の算定ではなく、寧ろこの期における住民の國內移住についてである。

今日傳はる徵兵簿には一五五八年の最初のそれのほかに、このエリザベス時代については、一五五九年・六〇年・六九年・七〇年・七三年・七七年・八〇年・八三年・八七年及び八八年がある。これ等いづれにあつても郡（ハンドレット）における十六歲から六十歲までの男子のうち戰鬪に耐え得る者が調査され、そして該當者の數・本名・副名・郡（ハンドレット）・教區及び住所が、時には彼の特技・身分・資力までが戶主の責任において報告されてゐる。登錄の不正は無論あつた。調査表は州（カウンティー）の徵兵官が集計して中央に報告するのであるが、この間に計算の誤謬は避け得べからざるものであつた。然し徵兵簿が當時における特定男子の實數の大體を傳へてゐるといつて差支へない。尤もこの點は徵兵簿作成の目的でもあつたわけである。

徵兵簿の語る他の事實は社會經濟史的には一層重要である。サセックスの隣接する二郡（レイプス）の報告では一五六九年と僅か四年後の七三年とでは五二二の差が出てゐる。ハムプシャーでは海岸部の報告が一五七四年から七七年の間に約五割の增加を示してゐるのに對し、內陸部では逆に五割の減少である。又ケムブリッチの諸郡（ハンドレット）のうちには一五六九年から七七年の間に二倍に增加したのがあつた。ケントではサットン地區（レイス）の北部の八郡（ハンドレット）が一五七三年から七七年の間に一八三六から一八八九といふ僅かな上昇しか示さないのに對し同じ地區（レイス）でも南部の四郡（ハンドレット）では七三年の七四八から六割の增加を遂げて七七年は一一九一に達してゐる。又同じ頃ミルトン地區（レイス）は六九六から八〇一の增加、他方隣接のワイ地區（レイス）では四八九から三五五、チャート地區では五〇〇から三〇〇の減少であつた。

隣接する二つの郡（ハンドレット）の報告においてこのやうな短期間のうちに起つた極端な增減の關係は、人口に顯著な變化を與へる重大な原因の全く見當らない當時にあつては、國內移住以外に適當な說明の手段が求められない。小さな村において徵兵簿に記載された人名の半ば以上が一五七七年から八三年の短かい間に交替してゐたといふ事實も亦エリザベス時代の國內移住を十分に裏書してゐる。全般の事情から推して大抵の人がこの時期には二代に少なくとも一度は移住してゐたといつてよい。そしてかかる國內移住の經驗が後の北米植民に際し大きな力となつた。寧ろそれは普通喧しくいはれてゐる宗教的要素以上ですらあつたのである。

（渡邊　國廣）

E・F・ヘックシャー

『產業革命以前における瑞典の人口傾向』

E. F. Heckscher, "Swedish Population Trends before the Industrial Revolution," The Economic History Review 2nd Series, Vol. 2, No. 3.

瑞典の組織的な人口統計は一七四九年に始まり、それは最初から驚くべき程完全であつた。だが完全性と確實性とに於てこの一七四九年に始まる統計とは比較しえぬとはいえ、最も古い統計はそれより約三十年も遡る。本稿の課題は、主にこの人口統計に基き、出來れば他國の統計と比較しつつ、瑞典の人口傾向を研究する事にある。

チャールズ十二世の二十年間の戰爭が終つた一七二一年の總人口は一、四四〇、七〇〇人で、それ以後十五年間は死亡率非常に低く、十九世紀中葉迄かゝる低さは見られない。この主要な原因は長期の戰爭の終結にある。即ち戰爭が一種の淨化として作用し老人や弱者を除去した爲、戰爭終結直後の方がその後の平時よりも條件が有利であつた。一七三六年頃より死亡率は急に上昇し、一七四三年に最高點に達し一〇〇〇人に對して一三・六人の死亡超過を示した。これは戰爭以外の原因即ち穀物の不作の結果である。低死亡率が過剩人口を創出するという意味に於て、この高死亡率は前十五年間の低死亡率に對する反動である。併し一七四五年には四三と同率の出生超過を示した。一七七一—二年の二度の凶作の結果、一七七三年には死亡率が空前の高さを示し、總人口の五・二五％が死亡した。其翌年から豐作の結果死亡率は低落し、人口增加は殆んど例外的な高さを示した。次いで一七八〇年代の一連の不作は死亡率の增大を齎らし、一七八八—九年には對露戰爭の結果として、死亡超過が生じた。だがそれに直ぐ續いて低死亡率、人口の急增加が見られた。

變動する要因は第一に死亡率であるが、これは收穫に強く影